湯ヶ原ゆき

国木田独歩

青空文庫

一

定めし今時分は閑散だらうと、其閑散を狙つて來て見ると案外さうでもなかつた。殊に自分の投宿した中西屋といふは部室數も三十近くあつて湯ヶ原温泉では第一といはれて居ながら而も空室はイクラもない程の繁盛であつた。少し當は違つたが先づ〳〵繁盛に越した事なしと斷念めて自分は豫想外の室に入つた。

元來自分は大の無性者にて思ひ立た旅行もなか〳〵實行しないのが今度といふ今度は友人や家族の切なる勸告でヤツと出掛けることになつたのである。『其處に骨の人行く』といふ文句それ自身がふら〳〵と新宿の停車場に着いたのは六月二十日の午前何時であつたか忘れた。兎も角、一汽車乘り遲れたのである。

同伴者は親類の義母であつた。此人は途中萬事自分の世話を燒いて、病人なる自分を湯ヶ原まで送り届ける役を持て居たのである。

『どうせ待つなら品川で待ちましようか、同じことでも前程へ行つて居る方が氣持が可いから』

と自分がいふと

『ハア、如何でも。』

其處で國府津までの切符を買ひ、品川まで行き、其プラツトホームで一時間以上も待つことゝなつた。十一時頃から熱が出て來たので自分はプラツトホームの眞中に設ける四方硝子張の待合室に入つて小さくなつて居ると呑氣なる義母はそんな事とは少しも御存知なく待合室を出て見たり入つて見たり、煙草を喫て見たり、自分が折り折り話しかけても只だ『ハア』『そう』と答へらるゝだけで、沈々默々、空々漠々、三日でも斯うして待ちますよといはぬ計り、悠然、泰然、茫然、呆然たるものであつた。其中漸く神戸行が新橋から來た。特に國府津止の箱が三四輛連結してあるので紅帽の注意を幸にそれに乘り込むと果して同乘者は老人夫婦きりで頗る空て居た、待ち疲れたのと、熱の出たのとで少ならず弱て居る身體をドツかと投げ下すと眼がグラついて思はずのめりさうにした。

前夜の雨が晴て空は薄雲の隙間から日影が洩ては居るものゝ梅雨季は爭はれず、天際は重い雨雲が被り重なつて居た。汽車は御丁寧に各驛を拾つてゆく。

『義母此處は梅で名高ひ蒲田ですね。』

『そう?』

『義母田植が盛んですね。』

『そうね。』

『御覽なさい、眞紅な帶を結めて居る娘も居ますよ。』

『そうね。』

『義母川崎へ着きました。』

『そうね。』

『義母お大師樣へ何度お參りになりました。』

『何度ですか。』

これでは何方が病人か分なくなつた。自分も斷念めて眼をふさいだ。

二

トロリとした間に鶴見も神奈川も過ぎて平沼で眼が覺めた。僅かの假寢ではあるが、それでも氣分がサツパリして多少か元氣が附いたので懲ずまに義母に

『横濱に寄らないだけ未だ可う御座いますね。』

『ハア。』

是非もないことゝ自分も斷念めて咽喉疾には大敵と知りながら煙草を喫い初めた。老人夫婦は頻りと話して居る。而もこれは婦の方から種々の問題を持出して居るやうだそして多少か煩いといふ氣味で男はそれに説明を與へて居たが隨分丁寧な者で決して『ハア』『そう』の比ではない。

若し或人が義母の背後から其脊中をトンと叩いて『義母！』と叫んだら『オヽ』と驚いて四邊をきよろ〳〵見廻して初めて自分が汽車の中に在ること、旅行しつゝあることに氣が附くだらう。全體旅をしながら何物をも見ず、見ても何等の感興も起さず、起しても其を折角の同伴者と語り合て更に興を増すこともしないなら、初めから其人は旅の面白みを知らないのだ、など自分は獨り腹の中で愚痴つて居ると

『あれは何でしよう、そら彼の山の頂邊の三角の家のやうなもの。』

『どれだ。』

『そら彼の山の頂邊の、そら……。』

『どの山だ』

『そら彼の山ですよ。』

『どれだよ。』

『まア貴下あれが見えないの。アヽ最早見えなくなつた。』と老婦人は殘念さうに舌打をした。義母は一寸と其方を見たばかり此時自分は思つた義母よりか老婦人の方が幸福だと。

そこで自分は『對話』といふことに就て考へ初めた、大袈裟に言へば『對話哲學』又た の名を『お喋舌哲學』に就て。

自分は先づ劈頭第一に『喋舌る事の出來ない者は大馬鹿である』

三

『喋舌ることの出來ないのを稱して大馬鹿だといふは餘り殘酷いかも知れないが、少くとも喋舌らないことを以て甚く自分で豪らがる者は馬鹿者の骨頂と言つて可ろしい而して此種の馬鹿者を今の世にチヨイ〳〵見受けるには情ない次第である。』

『旅は道連、世は情といふが、世は情であらうと無からうと別問題として旅の道連は難有たい、マサカ獨りでは喋舌れないが二人なら對手が泥棒であつても喋舌りながら歩くことが出來る。』など、それからそれと考へて居るうち又眠くなつて來た。

睡眠は安息だ。自分は眠ることが何より好きである。けれど爲うことなしに眠るのはあたら一生涯の一部分をたゞで失くすやうな氣がして頗る不愉快に感ずる、處が今の場合、如何とも爲がたい、眼の閉るに任かして置いた。

幾分位眠つたか知らぬが夢現の中に次のやうな談話が途斷れ〳〵に耳に入る。

『貴方お腹が空きましたか。』

『……甚く空いた。』

『私も大變空きました。大船でお辨を買ひましよう。』

成程こんな談を聞いて見ると腹が空いたやうでもある。まして沈

默家の特長として義母も必定さうだらうと、

『義母お腹が空きましたらう。』

『イヽエ、そうでも有りませんよ。』

『大船へ着いたら何か食べましょう。』

『今度が大船ですか。』

『私は眠て居たから能く分りませんが、』と言ひながら外景を見ると丘山樹林の容様が正にそれなので

『エヽ、最早直ぐ大船です。』

『大變早いこと！』

四

大船に着くや老夫婦が逸早く押ずしと辨當を買ひこんだのを見て自分も其眞似をして同じものを求めた。頸筋は豚に似て聲までが其らしい老人は辨當をむしやつき、少し上方辯を混ぜた五十幾歳位の老婦人はすしを頬張りはじめた。

自分は先づ押ずしなるものを一つ摘んで見たが酢が利き過ぎてとても喰へぬのでお止めにして更に辨當の一隅に箸を着けて見たがポロ〳〵飯で病人に大毒と悟り、これも御免を被り、元來小食の自分、別に苦にもならず總てを義母にお任して茶ばかり飲んで内心一の悔を懐きながら老人夫婦をそれとなく觀察して居た。

『何故「ビールに正宗……」の其何れかを買ひ入れなかつたらう』といふが一の悔である。大船を發して了へば最早國府津へ着くのを待つ外、途中何も得ることは出來ないと思ふと、淺間しい事には猶ほ殘念で堪らない。

『酒を買へば可かつた。惜しいことを爲た』

『ほんとに、さうでしたねえ』と誰か合槌を打て呉れた、と思ふと大違の眞中。義母は今しも下を向て蒲鉾を食ひ欠いで居らるゝ所であつた。

大磯近くなつて漸と諸君の晝飯が了り、自分は二個の空箱の一には笹葉が殘り一には煮肴の汁の痕だけが殘つて居る奴をかたづけて腰掛の下に押込み、老婦人は三個の空箱を丁寧に重ねて、傍の風呂敷包を引寄せ其に包んで了つた。最も左様する前に老人と小聲で一寸と相談があつたらしく、金貸らしい老人は『勿論のこと』と言ひたげな様子を首の振り方で見せてたのであつた。

此一二の悲劇が終つて彼是する中、大磯へ着くと女中が三人ばかり老人夫婦を出迎に出て居て、其一人が窓から渡した包を大事さうに受取つた。其中には空虚の折箱も三ツ入つて居るのである。

汽車が大磯を出ると直ぐ（吾等二人ぎりになつたので）

『義母今の連中は何者でしよう。』

『今のツて何に？』

『今大磯へ下りた二人です。』

『さうねえ』

『必定金貸か何かですよ。』

『さうですかね』

『でなくても左様見えますね』

『婆様は上方者ですよ、ツルリンとした顔の何處に「間抜の狡猾」とでも言つたやうな所があつて、ペチヤクリ〳〵老爺の氣嫌を取て居ましたね。』

『さうでしたか』

『妾の古手かも知れない。』

『貴君も隨分口が惡いね』とか何とか義母が言つて呉れると、益〳〵惡口雜言の眞價を發揮するのだけれども、自分のは合憎く甘い言をトン〳〵拍子で言ひ合ふやうな對手でないから、間の拔けるのも是非がない。

五

箱根、伊豆の方面へ旅行する者は國府津まで來ると最早目的地の傍まで着ゐた氣がして心も勇むのが常であるが、自分等二人は全然そんな樣子もなかつた。不好な處へいや〳〵ながら出かけて行くのかと怪まるゝばかり不承無承にプラツトホームを出て、紅帽に案内されて兎も角も茶屋に入つた。義母は兎につまゝられたやうな顏つきをして、自分は狼につまゝられたやうに顏をして（多分他から見ると其樣顏であつたらうと思ふ）『やれ〳〵』とも『先づ〳〵』とも何とも言はず女中のすゝめる椅子に腰を下した。

自分は義母に『これから何處へ行くのです』と問ひたい位であつた。最早我慢が仕きれなくなつたので、義母が一寸と立て用たしに行つた間に正宗を命じて、コツプであほつた。義母の來た時は最早コツプも空壜も無い。

思ひきや此藝當を見ながら

『ヤア、これは珍らしい處で』と景氣よく聲をかけて入て來た者がある。

可愛さうに景氣のよい聲、肺臟から出る聲を聞いたのは十年ぶりのやうな氣がして、自分は思はず立上つた。見れば友人M君である。

『何處へ？』彼は問ふた。

『湯ヶ原へ行く積りで出て來たのだ。』

『湯ヶ原か。湯ヶ原も可いが此頃の天氣じやアうんざりするナア』

『君は如何したのだ。』

『僕は四五日前から小田原の友人の宅へ遊びに行て居たのだが、雨ばかりで閉口したから、これから歸京うと思ふんだ。』

『湯ヶ原へ行き玉へ。』

『御免、御免、最早飽き〳〵した。』

平凡な會話じやアないか。平常なら當然の挨拶だ。併し自分は友と別れて電車に乘つた後でも氣持がすが〳〵して清涼劑を飮んだやうな氣がした。おまけに先刻の手早き藝當が其效果を現はして來たので、自分は自分と腹が定まり、車窓から雲霧に埋れた山々を眺め

『走れ走れ電車、』

圓太郎馬車のやうに喇叭を吹いて呉れると更に愉だと思つた。

六

小田原は街まで長い其入口まで來ると細雨が降りだしたが、それも降りみ降ずみたいした事もなく人車鐵道の發車點へ着いたのが午後の何時。半時間以上待たねば人車が出ないと聞いて茶屋へ上り今度は大ぴらで一本命じて空腹へ刺身を少ばかり入れて見たが、惡酒なるが故のみならず元來八度以上の熱ある病人、甘味からう筈がない。悉くやめてごろり轉がるとがつかりして身體が解けるやうな氣がした。旅行して旅宿に着いて此がつかりする味は又特別な

もので、「疲労の美味」とでも言はうか、然し自分の場合はそんなどころではなく病が手傳つて居るのだから鼻から出る息の熱を今更の如く感じ、最早や身動きするのもいやになつた。

しかし時間が來れば動かぬわけにいかない只だ人車鐵道さへ終れば最早着るたも同樣と其を力に箱に入ると中等は我等二人ぎり廣いのは難有いが二時間半を無言の行は恐れ入ると思つて居ると、巡査が二人入つて來た。

一人は張飛の痩て弱くなつたやうな中老の人物。一人は關羽が鬚髯を剃り落して退隱したやうな中老以上の人物。

※せた張飛は眞鶴駐在所に勤務すること既に七八年、齋藤巡査と稱し、退隱の關羽は鈴木巡査といつて湯ヶ原に勤務すること實に九年以上であるといふことは、後で解つたのである。

自分の注文通り、喇叭の聲で人車は小田原を出發た。

七

自分は如何いふものかガタ馬車の喇叭が好きだ。回想も聯想も皆な面白い。春の野路をガタ馬車が走る、野は菜の花が咲き亂れて居る、フワリ〳〵と生温い風が吹ゐて花の香が狹い窓から人の面を掠める、此時御者が陽氣な調子で喇叭を吹きたてる。如何ら嫁いびりの胡麻白婆さんでも此時だけはのんびりして幾干か善心に立ちかへるだらうと思はれる。夏も可し、清明の季節に高地の旦道を走る時など更に可し。

ところが小田原から熱海までの人車鐵道に此喇叭がある。不愉快千萬な此交通機關に此鳴物が附いてる丈けで如何か興を助けて居るとは兼て自分の思つて居たところである。

先づ二臺の三等車、次に二等車が一臺、此三臺が一列になつてゴロ〳〵と停車場を出て、暫時くは小田原の場末の家立の間を上には人が押し下には車が走り、走る時は喇叭を吹いて進んだ。

愈※平地を離れて山路にかゝると、これからが初まりと言つた調子で張飛巡査は何處からか煙管と煙草入を出したがマツチがない。關羽も持て居ない。これを見た義母は徐に袖から取出して

『どうかお使ひ下さいまし。』

と丁寧に言つた。

『これは〳〵。如何もマツチを忘れたといふやつは始末にいかんもので。』

と巡査は一ぷく點火てマツチを義母に返すと義母は生眞面目な顏をして、それを受取つて自身も煙草を喫いはじめた。別に海洋の絶景を眺めやうともせられない。

どんより曇つて折り〳〵小雨さへ降る天氣ではあるが、風が全く無いので、相摸灣の波靜に太平洋の煙波夢のやうである。噴煙こそ見えないが大島の影も朦朧と浮かんで居る。

『義母どうです、佳い景色ですね。』

『さうねえ。』

『向うに微に見えるのが大島ですよ。』

『さう?』

此時二人の巡査は新聞を讀んで居た。關羽巡査は眼鏡をかけて、人車は上だからゴロゴロと徐行して居た。

八

景色は大いが變化に乏しいから初めての人なら兎も角、自分は既に幾度か此海と此棧道に慣れて居るから強て眺めたくもない。義母が定めし珍しがるだらうと思つて居たのが、例の如く簡單な御挨拶だけだから張合が抜けて了つた。新聞は今朝出る前に讀み盡して了つたし、本を讀む元氣もなし、眠くもなし、喋舌る對手もなし、あくびも出ないし、さて斯うなると空々然、漠々然何時か義母の氣が自分に乘り移つて血の流動が次第々々にのろくなつて行くやうな氣がした。

江の浦へ一時半の間は上であるが多少の高低はある。下りもある。喇叭も吹く、斯くて棧道にかゝつてから第一の停留所に着いた所の名は忘れたが此處で熱海から來る人車と入りちがへるのである。

巡査は此處で初て新聞を手離した。自分はホツと呼吸をして我に返つた。義母はウンともスンとも言はれない。別に我に返る必要もなく又た返るべき我も持て居られない

『此處で又暫時く待たされるのか。』

と眞鶴の巡査、則ち張飛巡査が言つたので

『いつも此處で待たされるのですか。』

と自分は思はず問ふた。

『さうとも限りませんが熱海が遲くなると五分や十分此處で待たされるのです。』

壯丁は車を離れて水を呑むもあり、皆掛茶屋の縁に集つて休んで居た。此處は谷間に據る一小村で急斜面は茅屋が段を作つて叢つて居るらしい、車を出て見ないから能くは解らないが漁村の小なる者、蜜柑が山の産物らしい。人車の軌道は村の上端を横つて居る。

雨がポツ〳〵降つて居る。自分は山の手の方をのみ見て居た。初めは何心なく見るともなしに見て居る内に、次第に今見て居る前面の光景は一幅の俳畫となつて現はれて來た。

九

軌道と直角に細長い茅葺の農家が一軒ある其の裏は直ぐ山の畑に續いて居るらしい。家の前は廣庭で麥などを乾す所だらう、廣庭の突きあたりに物置らしい屋根の低い茅屋がある。母屋の入口はレールに近い方にあつて人車から見ると土間が半分ほどはすかひに見える。

入口の外の軒下に楕圓形の据風呂があつて十二三の少年が入て居るのが最初自分の注意を惹いた。此少年は其の日に燒けた脊中ばかり此方に向けて居て決して人車の方を見ない。立つたり、しやがんだりして居るばかりで、手拭も持て居ないらし、又た何時出る風も見えず、三時間でも五時間でも一日でも、あアやつて居るのだらうと自分には思はれた。廣庭には向た釜の口から青い煙が細々と立騰つて軒先を掠め、ボツ〳〵雨が其中を透して落ちて居る。半分見える土間では二十四五の女が手拭を姉樣かぶりにして上りがまちに大盥程の桶を控へ何物かを篩にかけて專念一意の體、其桶を前に七ツ八ツの小女が坐りこんで見物して居るが、これは人形のやうに動かない、風呂の中の少年も同じくこれを見物して居るのだといふことが自分にやつと解つた。

入口の彼方は長い縁側で三人も小女が坐つて居て其一人は此方を向き今しも十七八の姉樣に髮を結つて貰ふ最中。前髮を切り下て

可愛く之も人形のやうに順しくして居る廣庭では六十以上の而も何れも達者らしい婆さんが三人立て居て其一人の赤兒を脊負て腰を曲げ居るのが何事か婆さん聲を張上げて喋白つて居ると、他の二人の婆樣は合槌を打つて居る。けれども三人とも手も足も動かさない。そして五六人の同じ年頃の小供がやはり身動きもしないで婆さん達の周圍を取り巻いて居るのである。

眞黒な艶の佳い洋犬が一匹、腮を地に着けて臥べつて、耳を垂れたまゝ是れ亦尾をすら動かさず、廣庭の仲間に加はつて居た。そして母屋の入口の軒陰から燕が出たり入つたりして居る。

初めは俳畫のやうだと思つて見て居たが、これ實に畫でも何でもない。細雨に暮れなんとする山間村落の生活の最も靜かなる部分である。谷の奥には墓場もあるだらう、人生悠久の流が此處でも泡立ぬまでの渦を卷ゐて居るのである。

十

隨分長く待たされたと思つたが實際は十分ぐらゐで熱海からの人車が威勢能く喇叭を吹きたてゝ下つて來たので直ぐ入れちがつて我々は出立した。

雨が次第に強くなつたので外面の模樣は陰鬱になるばかり、車内は退屈を増すばかり眞鶴の巡査がとう〳〵

『何方へ行しやいます。』と口を切た。

『湯ヶ原へ行ふと思つて居ます。』と自分がこれに應じた。思つて居るどころか、今現に行きつゝあるのだ。けれど斯ふ言ふのが温泉場へ行く人、海水浴場へ行く人乃至名所見物にでも出掛る人の洒落た口調であるキザな言葉たるを失はない。

『湯ヶ原は可い所です、初めてゞすか。』

『一二度行つた事があります。』

『宿は何方です。』

『中西屋です。』

『中西屋は結構です、近來益※可いやうです。さうだね君。』と兎角言葉の少ない鈴木巡査に贊成を求めた。

『さうです。實際彼の家が今一番繁盛するでしよう。』と關羽の鈴木巡査が答へた。

先づこんな有りふれた問答から、だん〳〵談話に花がさいて東京博覽會の噂、眞鶴近海の魚漁談等で退屈を免れ、やつと江の浦に達した。

『サアこれから下りだ。』と齋藤巡査が威勢をつけた。

『義母これから下りですよ。』

『さう。』

『隨分亂暴だから用心せんと頭を打觸ますよ。』

『さうですか。』

齋藤巡査が眞鶴で下車したので自分は談敵を失つたけれど、湯ヶ原の入口なる門川までは、退屈する程の隔離でもないので困らなかつた。

日は暮れかゝつて雨は益※強くなつた。山々は悉く雲に埋れて僅かに其麓を現すばかり。我々が門川で下りて、更に人力車に乘りかへ、湯ヶ原の溪谷に向つた時は、さながら雲深く分け入る思があつた。

青空文庫情報

底本：「定本　国木田独歩全集　第四巻」学習研究社
　1971（昭和46）年2月10日初版発行
　1978（昭和53）年3月1日増訂版発行
　1995（平成7）年7月3日増補版発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：鈴木厚司
校正：mayu
2001年11月7日公開
2004年7月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

湯ヶ原ゆき

国木田独歩

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/